

# 『般若心経秘鍵』の理解

大沢 聖寛

## 一、問題の所在

『般若心経秘鍵』の一般的解説は次のようである。

本書は弘法大師が密教の考え方をもって『般若心経』を解釈したもので、本書以前は『般若心経』は『大般若経』の心髄、精要を略出要約したものと解釈されていた。

大師の言葉を借りて表現すれば、「大般若菩薩の真心真言三摩地法門」を説いた密教の経典であり、その根本の考え方は「顕密は人に在り、声字は即ち非なり」であつて、『般若心経』に顕密の違いがあるのではなく、その経典を解釈する人にあるのであり、それは「医王の目には途に触れてみな薬なり。解宝の人は礦石を宝と見る」という密教の立場である。

本書の内容は、序文として帰敬序、発起序、大綱序、大意序を説き、経の題目、翻訳の同異を説いている。本文では、心経の本文を五段に分け、第一に人法総通分、観自在菩薩より度一切苦厄の経文までを、因・行・証・入・時の五つに分けて解釈し、第二に分別諸乗分、色不異空より無所得故の経文までを、建||普賢

菩薩の内証（華嚴宗）、絶ニ文殊菩薩の内証（三論宗）、相ニ弥勒菩薩の内証（法相宗）、二ニ声聞・縁覚の内証（小乗教）、一ニ観自在菩薩の内証（天台宗）の法門であるという。第三に行人得益分、菩提薩埵より三藐三菩提の経文までを人と法に分けて、人に声聞・縁覚・法相・三論・天台・華嚴に真言行人を加え、法に因・行・証・入の四つを分けている。第四に総持明分、故知般若より真実不虛の経文までを、名・体・用の三に分け、また四種の呪明を声聞・縁覚・大乘・秘密藏の真言であるとし、第五に秘藏真言分、ハヤハヤよりヤハヤまでの梵語呪を五つに分け、声聞・縁覚・大乘・真言の行果を明かし、諸乗究竟菩提証入の意義を説いたものである。

その最後に頌を示して、その真言は觀察、読誦すれば無明をのぞいて即身に成仏できるといつている。終わりに、二つの問答によって、総持・陀羅尼は密教の人のために説き、顯教の心経も解空の人は密経であると見ると説いている。そして、流通分において偈頌を示している。

本書の成立年代は、大師の晩年といわれ、弘仁九年（八一八）頃と、承和元年（八三四）の両様の説がある<sup>(1)</sup>と説かれている。

この論文では、大師が基本的にどのような『般若心経』を見ておられたかを考えてみたい。つまり大師が密教の考え方をもって『般若心経』をどのように解釈されたか、一般的には「密教眼」をもって解釈されたと説明されるが、その「密教眼」の本当の意味を『般若心経秘鍵』を読み解くことによって示してみたい。

## 二、入文判釈

『般若心経秘鍵』は、先に示したごとく「帰敬序」「發起序」「大綱序」「大意序」「経の題目を釈す」「説

## 『般若心経秘鍵』の理解 (大沢)

処・翻訳の不同」「心経の顯密」「入文判釈」「二つの問答」「流通分」で成立しているが、『般若心経』の本文を解釈しているのは、「入文判釈」であり、これが『般若心経秘鍵』の中心である。この構成を総説で示すと、

此の経に總じて五分有り。第一に人法總通分、觀自在というより、度一切苦厄に至るまで是なり。第二に分別諸乘分、色不異空というより無所得故に至るまで是なり。第三に行人得益分、菩提薩埵というより三藐三菩提に至るまで是なり。第四に總歸持明分。故知般若というより眞實不虛に至るまで是なり。第五に秘藏眞言分、**ハヤハヤ**というより**びん**に至るまで是なり。<sup>(2)</sup>

であり、これは一般に『般若心経』の五分總説と呼ばれるものである。これを表示すると、

## 一 人法總通分

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄。

建(華嚴宗)―舍利子、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、受想行識亦復如是。

絶(三論宗)―舍利子、是諸法空相、不生不滅不垢不淨不增不減、

## 二 分別諸乘分

相(法相宗)―是故空中無色、無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界、乃至、無意識界、

二(二乘)―無無明亦無無明尽、乃至、無老死亦無老死尽、無苦集滅道、

一(天台宗)―無智亦無得、以無所得故。

## 三 行人得益分

菩提薩埵、依般若波羅蜜多故、心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、遠離一切顛倒夢想、究竟涅槃、三世諸佛、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提、

## 四 總歸持明分

故知、般若波羅蜜多是大神呪、是大明呪、是無上呪、是無等等呪、能除一切苦、眞實不虛。<sup>(3)</sup>

## 五 秘藏眞言分

故說般若波羅蜜多呪、即說呪曰、揭帝揭帝、般羅揭帝、般羅僧揭帝、菩提莎訶。<sup>(3)</sup>

の様になる。

### 三、人法総通分（別釈）

この五分総説の中、人法総通分は、大師が『般若心経』を解釈した序論であり総論である。また『般若心経』の基本である「空」(sunyata)を示した部分である。<sup>(4)</sup> 大師は次のように解説している。

第一の人法総通分に五有り。因行證入時はなり。觀自在と言つば能行の人、即ち此の人は本覺の菩提を因と為す。深般若は能所觀の法、即ち是れ行なり。照空は則ち能證の智、度苦は則ち所得の果、果は即ち入なり。彼の教に依つて人の智無量なり。智の差別に依つて時また多し。三生三劫六十百妄執の差別是を時と名づく。頌に曰く、

觀人智慧を修して 深く五衆の空を照す歴劫修念の者は 煩を離れて一心に通ず。<sup>(5)</sup>

これは『般若心経』の

觀自在菩薩が、深なる般若波羅蜜多を行ぜし時、五蘊は皆、空なりと照見して、一切の苦厄を度したまへり。

を大師が「人法総通分」として、修行からさとりの四つの段階（因・行・証・入）と、成仏へ至る速度の「時」との五を示したものである。「觀自在菩薩が」をの「觀自在」と縮めて七宗（華嚴宗・三論宗・法相宗・声聞乘・緣覺乘・真言宗）の修行をする人（能行の人）のことであり、この人は本来のさとりの智慧を因として修行すると説き、「深なる般若波羅蜜多を行ぜし時」をの「深般若」と縮めて、能觀（考察者）の智で所觀（考察される対象）のことわりを觀ずることこれ行であると説き、「五蘊は皆、空なりと照見して」をの「空照」と縮めて、これはよく證する智慧で、それは五蘊（色・受・想・行・識）の集まりである存在

## 『般若心経秘鍵』の理解 (大沢)

は、皆空であるとさとするので證であると説き、「一切の苦厄を度したまえり」をの「度苦」と縮めて、災難を救い彼岸に度すことわたで、所得の果つまり入涅槃であると説く。最後に「時」である成仏へ至る速度であるが、これは「深なる般若波羅蜜多を行ぜし時」の「時」にあたり、修行に必要とする「時間」にいろいろあることを説いている。つまり『般若心経』に説かれている人の智慧が無限であり、異なりがあつて、さとりへの時間が異なるのを「時」と名付けるのであると説かれている。

この「人法総通分」に、

「依<sup>テ</sup>彼<sup>ノ</sup>教<sup>ニ</sup>人智無量<sup>ナリ</sup>」<sup>(6)</sup>

とある。これを書き下し文にすると、

「彼の教によつて人の智無量なり。」

となる。「彼の教」これは『般若心経』であり、「人の智無量」とは、人の智慧が無限であるという意味である。つまり大師は『般若心経』は人の智慧が無限であることを説いた經典と考えていたことになるのである。

## 四、「般若心経」を示す文

『般若心経秘鍵』の文章で、『般若心経』を指す文を掲げると、

一、大般若波羅蜜多心経といつば、すなわちこれ大般若菩薩の真心真言三摩地法門なり。<sup>(7)</sup>

二、佛説摩訶般若波羅蜜多心経といつば、この題額について二つの別あり。梵漢別なるが故に、今いわく佛説摩訶般若波羅蜜多心経といつば胡漢雜え擧げたり。説心経の三字は漢名なり。餘の九字は胡号なり。もし具なる梵名ならば**ボダハシヤマカハラジヤハラミダフリダソタラシ**<sup>(8)</sup>といふべし。

三、この經に數の翻譯あり。第一に羅什三藏の譯、今の所說の本これなり。<sup>(9)</sup>

四、この經の眞言はすなわち大心呪なり。<sup>(10)</sup>

五、この經に總じて五分あり。<sup>(11)</sup>

六、われ秘密眞言の義によつて、略して心經五分の文を讚す。一字一文法界に遍じ、無終無始にしてわが心分なり。<sup>(12)</sup>

の六ヶ所に見られるが、五の「五分總説」を除くと『般若心經』の内容を密教の考え方、密教眼で直接解説してないのである。また五の「五分總説」も總説として示していて、「密教眼」そのものではない。

そこで先の「彼の教によつて人の智無量なり。」の「かの」について検討を加えると、大師には同じような例が「大意序」の所にあるので示すと、

余童を教うるのついでに聊か綱要を撮つて彼の五分を釋す。釋家多しといえどもいまだ此の幽を釣らず。<sup>(13)</sup>

である。この現代語訳を『空海般若心經秘鍵』より示すと、

私は、『般若心經』を弟子達に教える方法として、いささか全体の要約を五つに分けて解釈いたします。

この經典についての注釈家は多く居られますが、この深い大切なところを読み取った解釈は、まだありません。<sup>(14)</sup>

である。従つて「彼の」は『般若心經』を指すのである。この例を参考として、再び、別釈である第一の人の法總通分の「彼の教による人の智無量なり」を頼瑜僧正（一二二六—一三〇四）はどのように考えられていたかを示してみると、

依彼教人等者此下釋時故當經中時字凡意云依用建絶相等諸教行人智恵有上中下等不同故修行得果

## 【般若心経秘鍵】の理解 (大沢)

時分有<sup>ニ</sup>長短差別<sup>一</sup>也<sup>為</sup>何故次第違<sup>レ</sup>経乎謂時<sup>ハ</sup>依法而立<sup>レ</sup>故先舉<sup>レ</sup>法歟俱舍云時無別躰依法而立<sup>ト</sup>(15)  
 と説かれて、諸教の行人の智恵が不同であつて、修行の得果の時分に長短差別があることを示している。

また『般若心経秘鍵の声読みと解説』で示すと、

「彼ノ教ニ依ル人ノ智無量ナリ」。般若心経に華嚴の教えやら、文殊さんの教えで「不生不滅」、あるいは、「限界も無く乃至意識界も無く」の、あの弥勒さんの、法相宗の教え、それから天台宗の教え、「智も無く亦得も無し」、そういう色々な般若心経に説いてある「彼の教」、彼の教え、色々の教えによつて、その教えに頼る人、依存する人は、その行者の「智恵は、無量なり。」人はみんな同じような顔をしているけれども、能力といい、希望といい、考えといい、皆違ふのだから、それで「智無量なり」と、  
 と説かれていることからして、「彼の教」は『般若心経』と考へてよいと思う。従つて、「彼の教によつて人の智無量なり。」は、『般若心経』に説かれているのは人の智が無量であるということ、これが大師の主張である。

## 五、結論

ではどうしてこのことが、「密教の考え方」「密教眼」なのかである。

それは、『秘密曼荼羅十住心論』巻第十の「大意」に、

また云く、復次に三藐三菩提の句を志求するには、心の無量を知るをもつての故に身の無量を知る。身の無量を知る故に智の無量を知る。智の無量を知るが故にすなわち衆生の無量を知る。衆生の無量を知るが故にすなわち虚空の無量を知る。これすなわち横の義なり。衆生の自心その數ず無量なり。衆生狂醉

して覺せず知せず。大聖彼の機根に隨つてその數を開示したもう。唯蘊拔業の二乗はただし六識を知る。他縁覺心の兩教はただし八心を示す。一道極無はただし九識を知る。釋大衍には十識を説く。大日經王には無量の心識無量の身等を説く。かくのごとくの身心の究竟を知るは、すなわちこれ秘密莊嚴の住處を證するなり。<sup>(17)</sup>

つまり、三藐三菩提・正しいさとりを求めるものは、心の無量、身の無量、智の無量、衆生の無量、虚空の無量を知ることであり、『大日經』では無量の心識・身を説き、これは秘密莊嚴の住處を証することであり、大日如来の眞實の住心に通じているのである。

また『梵字悉曇字母并釋義』に、

いかなるをか五智という。いわく一は大円鏡智、二は平等性智、三は妙觀察智、四は成所作智、五は法界體性智なり。この五智より三十七智二百二十八智ないし十佛刹微塵數の不可説不可説の一切智智を流出す。かくのごとく無量の智は悉く一字の中に含めり一切の衆生は皆ごとごとく無量の佛智を具足せり。<sup>(18)</sup>と説かれていて、「無量の智」は一字である悉曇の阿字（大日如来）に含まれていて、一切の衆生は、この無量智を持っているとしているからである。

このことは、『般若心經秘鍵』の「流通分」であり、四の『般若心經』を示す文の第六に示した。

われ秘密眞言の義によつて、略して心經五分の文を讚す。一字一文法界に遍じ、無終無始にしてわが心分なり。<sup>(19)</sup>

に通ずるのである。

以上『秘密曼荼羅十住心論』卷第十、並びに『梵字悉曇字母并釋義』の説かれることから、「人法総通分」の「かの教による人の智無量なり」と一致することにより、この文が大師が『般若心經』を「密教の考え方」、

## 『般若心経秘鍵』の理解 (大沢)

「密教眼」で見た結論である。

## 註

- (1) カセットブック小田慈舟大僧正伝授「十卷章」素読解説頁一七五―一七六
- (2) 定本弘法大師全集第三巻頁七
- (3) 勝又俊教博士著者『秘蔵宝鑰般若心経秘鍵』佛典講座32、大蔵出版、頁四四五参照
- (4) 平川彰博士『般若心経の新解釈』世界聖典刊行協会、頁六九「この部分は、弘法大師が「人法総通分」と名づけられたように、般若心経の核心を簡略に示した部分である。ここでいう「人」とは般若波羅蜜の実践者としての観自在菩薩であり、「法」とは実践される般若波羅蜜（玄奘は「波羅蜜多」と訳したが、便宜上ここには、同じ意味の「波羅蜜」を用いる）のことである。そして般若波羅蜜の実践とは、五蘊皆空を照見して、一切の苦厄を度することである。以上、言葉は簡略であるが、中には深い意味を含んでいるので、理解は容易でない。」と説かれている。
- (5) 定本弘法大師全集第三巻頁七
- (6) 定本弘法大師全集第三巻頁七
- (7) 定本弘法大師全集第三巻頁四
- (8) 定本弘法大師全集第三巻頁五
- (9) 定本弘法大師全集第三巻頁六
- (10) 定本弘法大師全集第三巻頁六
- (11) 定本弘法大師全集第三巻頁七
- (12) 定本弘法大師全集第三巻頁一二

- (13) 定本弘法大師全集第三巻頁四
- (14) 金岡秀友訳・解説『空海般若心経秘鍵』太陽出版、頁八〇、頁一〇六には「彼の教」について、「この「深般若」を修行する人の智慧には、さまざまな歴史的・個人的条件のちがいがあって、その限らない種類を数えあげることができません」とある。
- (15) 頼瑜『秘鍵開蔵鈔』二、頁四丁左
- (16) 堀内寛仁口述『般若心経秘鍵の声読みと解説』頁一八二
- (17) 定本弘法大師全集第二巻頁三〇七―三〇八
- (18) 定本弘法大師全集第五巻頁一〇四―一〇五
- (19) 定本弘法大師全集第三巻頁一二
- 【キーワード】 般若心経秘鍵、弘法大師、密教眼、人法総通分、人智無量